

## 教会暦と聖書の流れ

マタイ 18 章の教会共同体についての教えをまとめた箇所結びです。このたとえ話は、主の祈りの中の「わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします」という祈りの解説のようなたとえ話だと言えるでしょう。

## 福音のヒント

(1) 「7」という数は「完全さ」を表す数だと言われます。「7の70倍」は「490回まで」という意味ではなく「無限に」という意味です。1タラントンは1デナリ(一日の日当)の6000倍にあたると言われます。つまり、この家来の主人に対する負債(1万タラントンは、自分が仲間に貸したお金(100デナリ)の60万倍ということになります。非常識な額ですが、これは神のゆるしのはかりしれない大きさを表わしています。なお、イエスはペトロに対して無限のゆるしを求めています。たとえ話の中では1回しかゆるされません。21-22節と23節以下は本来別の伝承だったと考えられます。

ここで「主君」と訳されている言葉はギリシア語では「キュリオス」で、普通「主・主人」と訳される言葉です。「家来」のほうは「ドゥーロス」で、普通は「奴隷・しもべ」と訳されます。この主君と家来の関係が、神と人との関係のたとえであることは明白です。

たとえ話の内容そのものも特別な説明を必要としないでしょう。

(2) 23節からのたとえでは罪のゆるしが「借金の帳消し、負債の免除」のイメージで語られています。主の祈りの中の「わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします」(聖公会・カトリック共通訳)も、新共同訳聖書では「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」(マタイ6・12)となっています。この「負い目」は「負債」を意味する言葉です。ルカ7・41-42にはこういうたとえもあります。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか」これも明らかに罪のゆるしのたとえです。人は確かに罪を「負債」のように感じる場合があります。だから何とか返済(埋め合わせ)しなければと思いますが、実は「罪」という借金を返済することはできません。また、罪を犯したという事実は永遠に消えることはありません。

それでも神はゆるすのです。なかったこと(帳消し)にしてしまうというのです。なぜでしょう。ルカ7章のたとえでは「返す金がなかったので」借金を帳消しにし、マタイ18章でも返すことのできない家来を「主君は憐れに思って」ゆるしています。

(3) 罪を犯した人間というのは、いわば「借金で首が回らない状態」なのです。どう

にも行き詰まり、生きていくことができなくなっている人間を、それでも生かそうとすること、これが借金の免除のたとえで語られる罪のゆるしです。現実の社会の中にある「倒産しそうな会社のための債権放棄」や「過大な債務に苦しむ貧しい国のための債務帳消し」も、同じように「その企業や国をなんとか生き残らせるため」というのがその理由です。

神は人間が罪のために滅んでしまうのが惜しいのです。「あわれに思って」はギリシア語では「スプラクニゾマイ」で、目の前の人の苦しみを見て、自分のはらわたがゆさぶられるという、深い共感compassionを表すことばです(C年年間第 15 主日の「福音のヒント」参照)。なぜ神が人の罪をゆるすのか、その答えはここにあります。

罪のゆるしが「借金の帳消し、負債の免除」のたとえで語られる理由はおそらく、ゆるしが相手を生かすことであることと、ゆるされる喜びの大きさを強調するためでしょう。

(4) 「どうしてもあの人はゆるせない」「ゆるしてはいけないこともある」という思いを抱くことがわたしたちにはあります。悪いことをした人が反省も謝罪もせず、のうのうと生きているように感じるとき、特に強くそう感じるでしょう。これは当然のことです。きょうのたとえで「ゆるし」とは一方的に借金を帳消しにしてやるという以前に、その人の罪の痛みへの共感から相手を生かそうとすることでした。そして、ゆるされた人が仲間をゆるさなかったのは、彼がゆるされた事実だけを受け取り、ゆるしてくれた主君の心を受け取らなかったからだとも言えるでしょう。「どうしてもゆるせない」という現実の中で、それでも神のゆるしの心を受け取って生きようとするとき、わたしたちにできることは何でしょうか。

(5) 「主の祈り」(マタイ6・9-13)の聖公会・カトリック共通訳では「わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします」となっていますが、上で見た新共同訳の「赦しました」はギリシア語の完了形の訳、「ように」は「ホース」という接続詞の訳で、新共同訳のほうが直訳といえます。この祈りは2つの意味で受け取ることができます。「わたしたちはもう人の罪をゆるしていますから、わたしたちの罪をゆるしてください」が一つ。もう一つは「わたしたちの罪をゆるしてください。そうすればわたしたちも人をゆるしますから」(ルカ11・4 参照)です。聖公会・カトリック共通訳は、両方の意味をどちらも排除しないために、あえて前半と後半をつなぐ接続詞「ホース(ように)」を訳さず、「わたしたちも」の「も」によって前半との結びつきを示そうとしているようです(結果的に「わたしたちも人をゆるします」が独立した文章になって宣言のように聞こえてしまう、という批判もありますが)。実際にはきょうの福音のたとえ話のように、先に神のゆるしがあり、だから人は人をゆるすべきであり、人が人をゆるさなければ神のゆるしは無意味になってしまう、ということでしょう。わたしたちはどのような思いで、この祈りを唱えているのでしょうか。

